

## 「今や現代の古典：20、21世紀に誕生したピアノ独奏曲10曲」

伊藤美由紀（2400文字）

ピアノは、作曲家が音楽を始める楽器として馴染み深く、ピアニスト兼作曲家も多数存在し、他の楽器に比べてピアノ独奏曲は多い。ショパン、リストのロマン派ピアノ作品の影響を受けた次世代の、ピアノという楽器にこだわりをもった作曲家の中から、ピアニストのレパートリーとして既に定着している20世紀前半の調性感の残る作品から、無調の初期の作品までに焦点をあて、小品で構成される作品集も含めて10作品を選曲する。

最初に、ピアニストとしても活躍し、大きな手を武器にヴィルトゥオーソ的な演奏から迫力あるピアノ曲を書いた作曲家の多々いるロシアから2名あげる。

### ■ラフマニノフ / 《24の前奏曲》(1903, 1910) (CD『24の前奏曲』アシュケナージ)

ラフマニノフ自身、卓越したピアノ技術と12度まで同時に押さえられるほどの巨大な手をもった優れたピアニストであったことから、自身で初演、再演することも多く、重厚な和音、ドラマチックな展開、超絶技巧的なピアノ書法で作曲した。ロシアのロマン派音楽を代表する作曲家として、調性的で民族的な旋律を含み、叙情豊かな作品である。ショパンの《24の前奏曲》をモデルに、作品23の10曲の前奏曲と、作品32の13曲の前奏曲に、1892年発表された鐘の音で有名な前奏曲ハ短調を含んだ《24の前奏曲》である。

### ■プロコフィエフ / 《ピアノソナタ第7番》(1943)

プロコフィエフも優れたピアニストとして活躍しており、全9曲のピアノソナタの、円熟期に作曲された《ソナタ第7番》は、第二次世界大戦中に書かれたことから「戦争ソナタ」と呼ばれる作品の1曲で、演奏される機会の多い作品である。3楽章で古典的なソナタ形式で書かれている。無調的な響きで、野性的なエネルギー、叙情的な美しさを表現しており、打楽器的な巧みなリズムミカルな表現による3楽章はアンコールとしても度々取り上げられる。

次に、フランスから音の響きにこだわった2名を紹介する。

### ■ラヴェル / 《水の戯れ》(1901)

ラヴェルは、パリ音楽院のピアノ科で、同い歳で親友のリカルド・ヴィニェスから文学、音楽において刺激を受けた。彼のピアノ作品は、ヴィニェスによ

り初演されている。出世作の《水の戯れ》は、師であるフォーレに献呈されており、ドビュッシーの《水の反映》にも影響を与えた。リストの《エステ荘の噴水》から影響を受けており、技巧的なトリルや、7、9度の色彩豊かな和音を巧妙に使って表現しており、「あらゆるピアノ書法の革新の出発点である」と、ラヴェル自身が語っている不朽の名作である。

■ドビュッシー / 《映像 I, II》(1904/05, 1907) (CD『映像第1、2集』ミケランジェリ)

ドビュッシーもピアノから音楽に関わり、ピアノは音楽表現をする上で特別な思い入れのある楽器であった。ドイツ・ロマン派和声からの離脱、伝統的な機能的和声法の否定により、新たな響きの色彩を求め、ペダルに細心の注意を払い、最後の倍音が消えるまで残響に耳を傾ける。《映像》は、第1、2集と3曲ずつからなる詩的な音楽的映像の結集である。「シューマンの左かショパンの右に位置するだろう」と本人も語るほどの中期の自信作でもある。音楽評論家ルイ・ルロワは、「ピアノ作曲技法による真の革命である」と評価する。

最後に12音技法に始まりセリー技法を駆使した作品を含め、無調に至った6名のピアノ作品をあげる。

■シェーンベルク / 《ピアノ組曲》作品25 (1921-23) (CD『シェーンベルク・ピアノ作品集』ポリニー)

《ピアノ組曲》作品25は、伝統的な舞曲の形式からなる6作品で構成され、全て同じ音列で統一された12音技法で作曲されている。無調として確立された12音技法で書いた彼の最初の作品である。

■メシアン / 《鳥のカタログ》(1956-58) (CD『鳥のカタログ全曲』児玉桃)

オルガン奏者でもあるメシアンにとって、ピアノも作曲の主体となる楽器である。彼の妻でありピアニストであるイヴォンヌ・ロリオの影響は大きく、彼のピアノへのこだわりは、彼女の協力により達成された。作曲家ポール・デュカの忠告に従い、鳥の採譜を行い、鳥の複雑な音色とリズムに魅了され音として体系化しようと試み、その集大成となるのが、77種類の鳥の声が全7巻13曲で構成され、3時間を超える大作となった《鳥のカタログ》である。

■リゲティ / 《ピアノ練習曲》I, II, III (1985-2001) (CD『リゲティ・ピアノ全集』フレデリック・ウーレン)

リゲティの《ピアノ練習曲》は、全3巻18曲である。ドビュッシーの《ピアノ練習曲》をモデルに全12曲の予定であったが、アイデアが膨らみ18曲とな

る。音楽用語と詩的で描写的なタイトルが各々につけられている。硬質で透明感のある洗練された繊細な響き、複雑なリズムが駆使された技巧的な作品集である。

■ブーレーズ / 《ピアノソナタ 2 番》(1948)(CD『ブーレーズ・ピアノ全集』ポリニー)  
ブーレーズの初期のセリエリズムに基づいて書かれた代表作のひとつで、12 音音列が複雑に入り組んでいる難曲であり、4 楽章からなる。

■シュトックハウゼン / 《ピアノ曲 I~IV》(1952) (CD『シュトックハウゼン・ピアノ作品集』コンタルスキー)

シュトックハウゼンの《ピアノ曲》は、全 19 曲ある。ダルムシュタット夏期講習会で初演された最初のセット(I~IV)は、点描音楽から群作法に至る過程を試みた作品集である。構造、ピッチ、強度などの要素が「6」のセリーで構成されている 1 番、ピッチセット、強度が「3」のセリーで構成されている 3 番など、全 4 曲の小品で、続けて演奏されることが多い。パリ音楽院のメシアンのアナリクラスで学び、彼の影響をうけ、セリエリズムに基づく彼の原点となる初期の重要な作品である。

■武満徹 / 《ピアノ・ディスタンス》(1961)

ドビュッシー、メシアン等の影響を受けた武満徹の初期のピアノ作品で、高橋悠治の為に書かれた。3 秒ごとに五線に縦線がひかれ、各々の音には、詳細な表情記号、強弱、ペダルの踏み替えが表記されている。繊細な響き、倍音、残響が丁寧にコントロールされており、日本的な「間」の感覚で研ぎすまされた緊張感を表現している。